

くさしぎ便り No.11

くさしぎ・草の根市議と市政を考える会 2014年11月発行 e-mail kusasigi@nifty.com
ホームページでも発信中★☆ 「辻よし子と歩む会」で検索してください！

「くさしぎ便り」第11号をお届けします。ウクライナで紛争をはじめ、世界の各地で民族対立のニュースを耳にすることが増えました。共生する知恵はあるのでしょうか？ 今回はちよつと背伸びして、東欧の歴史を学ぶ中で「民族の共生」について考えてみました。

「あきる野つばら 学びの場 その11」 ご報告

6月26日あきる野ルピアにて開催

ヨーロッパに学ぶ 民族共存の知恵

話題提供者 **岡部 保博さん**
まとめ **佐野 泰道さん**



- おかベ やすひろさんプロフィール ●
元都立高校社会科教師。現役時代、林業体験を取り入れるなどユニークな教育実践を行う。調べたり考えたりすることが好き。



はじめに・・・

★ 岡部先生との出会い、お話をさせていただくようになった経緯 ★

20年前、僕は25年間務めた都立高校の教師を辞めました。学校教育(の現状)に愛想が尽きたのと、ソ連の崩壊を目の当たりにして、わずかに残っていた社会主義の可能性に絶望し、世界中の人々がいとも簡単にブッシュに乗せられて、湾岸戦争を容認し協力していくのを見て、おう、人類の未来に期待するのは止めようと決意しました。50歳以後は趣味と自分が見たいと思うことだけをやりようと思いました。ところが、学生時代以来の社会の不条理が目

をつぶってはられない習性が災いして、日の出町の二ツ塚処分場へのごみ搬入のニュースにいてもたってもおられず、平成十年の正月の五日から処分場ゲート前に立つようになりました。一つでも社会との関わりを持ち始めれば、あとはあれもこれも無視できなくなります。社会を変えていこうとすれば、多くの人々の力が必要です。ぼくが協力してもらえる人といえは、やはり教師をやっている(いた)人たちです。もう二度と教育と教師とは関わりを持つまいと思っていたけど、そうもいけなくなりました。

何の署名だか忘れましたが、先生方に署名をしてもらおうと思って、五日市高校に行きました。その時組合の分会長をしていたのが社

会科の岡部先生です。2・3年生の総合学習の時間に林業体験を取り入れて、退職されるまで、ユニークで有意義な教育実践をされました。昨年の暮れくらいでしたでしょうか、岡部先生から久しぶりに連絡があり、ヨーロッパを旅行して感じたこと・考えたことが有り、それを話したいので、どこか聞いてもらえる場がないだろうかという話でした。ぼくが西多摩自由大学という先生方を中心とした学習活動の実行委員をやっていたので、自由大学で話をさせてもらえないかという話でした。

あいにく自由大学は2年前に10年間の実践を終えて解散していました。しかし、興味深い話が聞けそうなので、あきる野九条の会とクサシギに話を持ち込んだ次第です。九条の会はあまり乗り気でなく一忙しくてためらわれておられるようでした。クサシギの皆さんに場を設けていただくことになりました。前置きが長くなりました。学習会の内容に入ります。

①第一次世界大戦/ハプスブルク帝国の崩壊

岡部さんはまず、東ヨーロッパの民族問題を考えるうえで基礎となる知識について話されました。下の地図をご覧ください。この地図を見ながら、レジメに沿って詳しい説明を頂きましたが、残念ながらあまり頭の中に入っていきません。(岡部さん、ごめんなさい)。

【岡部さんからの補足】

ハプスブルク家はドイツ語圏であるウィーンを拠点に、神聖ローマ帝国(=ドイツ帝国)の皇帝位に長く居続けました。しかし、19世紀になって、オーストリアを除くドイツ語圏がその支配領域から失われ、ハプスブルク帝国は東欧のスラブ人やハンガリー人が多く住む地域を領土とするようになりました。第一次世界大戦に敗れた帝国から、戦後の「民族自決」の流れに乗って、諸民族が新しい国家として独立しました。【補足終わり】

第一次世界大戦後のドナウ・ヨーロッパ



後の話との関係で、ガリツィアについて僕が理解できたことを書きます。ガリツィアはオーストリア・ハンガリー帝国のオーストリア領でした。この地域にはポーランド人、ユダヤ人、ウクライナ人その他の少数民族が併存していました。地図を見て分かるように西部（西ガリツィア）はポーランド人が半数以上占めており、東部（東ガリツィア、現在のウクライナ西部）の半数以上はルテニア人（オーストリア帝国ではウクライナ人をこう呼んでいました）です。が、第一次世界大戦でオーストリアが敗北するとウクライナ人が国家形成を目指し、ポーランドも領有を主張します。それもつかの間、ポーランドはソ連と国境線を巡って争い、1921年暫定国境線（カーゾンライン）が引かれ、東ガリツィアはソ連の管理下に置かれます。第二次大戦中、ガリツィアを含むポーランド全土がナチスドイツの占領下におかれ、ドイツの敗北後、東ガリツィアはソビエト連邦を構成するウクライナ共和国の一部となりました。



②民族共生の例「交換保育」

このように他民族が交錯し併存する旧ハプスブルク帝国領で、異なる言語・異なる文化・習俗を持った者同士が、互いを理解し平和共存していくために、さまざまの試み・努力がなされますが、その中で特に注目に値するものとして岡部先生が挙げたのが「交換保育」というものです。これは「異言語集団が日常的に接触する地域で、子どもを異なる民族の家に一定期間預けて養育してもらい慣習」です。「期間は数か月から2年程度で、お互いの子どもを交換するのが原則です。」「実の子どもと同様、通学、交友、家事手伝いをした。年齢は6、7歳から14歳くらいまで。階層

的には、中間層から最下層の農民まで」行われたそうです。19世紀の後半から20世紀前半まで活発に行われたそうです。

また、帝国内の各民族は平等・対等となることを目指し、公用語はドイツ語だったが、他の民族言語も役所での手続きなどに使う言語として使用を認められるようになっていったそうです。

③旧ハプスブルク帝国領「ガリツィア」を通してみるウクライナ問題

現在もウクライナ共和国の一部になっているガリツィアは多くの民族を内部に抱えています。ウクライナの東部にはロシア人がたくさん住んでいます。岡部さんはソルジェニーツィン（ロシア人とウクライナ人の混血）の言葉を紹介しつつ、問題の複雑さ、困難さを指摘されました。ソルジェニーツィンは言います。「ウクライナでは、自分をウクライナ人だと思っている人、ロシア人だと思っている人、何人だとも思っていない人が各州ごとに独特の関係にあるので難しい問題が生じる」「今日ウクライナを分離独立させるということは数百万の家族と数千万の人間を分断することだ」「なぜなら、どんな少数派の中にも、さらに少数派が含まれている」のだから。

ソ連の崩壊によるウクライナの分離独立は、ソルジェニーツィンの危惧した通りの困難を生み、ついに今日の事態を生じさせてしまいました。岡部さんはあえて今日の事態の近因について触れず、ソルジェニーツィンを引用して、その根源にぼくたちの目を向けてくれました。

僕はもう一つ、ウクライナ問題が発生した初期の段階で、東京新聞の記事が指摘していた、ウクライナ政府のロシア人に対する差別・

抑圧に目を向けたいと思います。これは②で学んだ 他民族の言語や文化の尊重と相反します。こういうことをしては問題が生じるのは当たり前です。歴史から何も学ぼうとしないのは、日本人だけではないようですね。

一方、あとで紹介する梶田孝道氏によると、フランス系住民の独立問題を抱えるカナダでは、言語レベルでは英語・仏語を平等に扱う（公用語とする）「二言語主義」を導入するとともに、英系・仏系以外の複数の民族集団の文化をも認め、「二言語・多文化主義」を採用することで分裂の危機を乗り越えようとしているそうです。梶田氏は書いています。

「…ウクライナ語・ドイツ語などの出身言語を教育言語とする公立学校が多数設立され、「祖先言語」が日常生活の中で復活している。こうした政策は教育以外では、出版、放送、展示などの分野でも見られ、連邦政府による多文化主義振興のための援助が多大な額に上っている。」

カナダのこのような政策こそ歴史から学んだ政策だと思います。



④ 日本周辺の民族と

国境を考える手がかりに

ここで岡部さんは二つの論稿と一冊の本を紹介してくれました。そのうちの二つを読みました。先生がおっしゃる通り、とても示唆に富んだものでした。

◎ 羽場久美子著

「尖閣・竹島をめぐる『固有の領土論』のあやうさ——ヨーロッパの国際政治から」（『世界』2013年2月号）

著者の羽場氏は①で述べた諸民族が交錯し

て歴史を築いてきた中欧地域を専門としており、「固有の領土」というのは先取という考え方に基づくが、どこまで遡ればよいのか」と疑問を投げかけています。そして、南北アメリカ大陸で「固有の領土」論を言い始めれば、すべての白人が出ていかねばならないことになる。オーストラリアもそうだ。「移民の国」は、まさに「固有の領土」論を侵して、現在、もともとは先住民がいた地域に居座っていることになる、と「固有の領土」論に対して痛烈な批判を提出している。

そのうえで、諸民族が交錯して歴史を築いてきたヨーロッパは 1975 年のヘルシンキ宣言で、国境を凍結することで新たな戦争を防止し、現状を維持することで平和を保つ知恵を生み出したといえます。

「国境線の変更は問題の最終的解決でなく、新たな対立を生むことである。……国境線の変更は、何百年にわたる怨念と戦争の火種に火をつけ、対立を燃え上がらせることになる。国境紛争とはそのようなものである。一瞬のある事件により、人が一人犠牲になることにより、政府にも国民にも止められない熱狂的対立状況を引き起こしてしまう。」

話し合いで解決できない抗争領土は、長期的にまずは「現状維持」（放っておくこと）で凍結すべきである。そのうえで双方が満足する方向を時間をかけて探っていく。」

そして羽場氏は「漁業は共同漁場にすること、資源は共同開発すること」を提案します。さらに、文化人類学の成果に学び、境界線を異なる民族や人種の「出会いの場」としてとらえることを提唱しています。

「そこで人々は異なる宗教、異なる言語、異なる

生活習慣と出合いつつ、……共存していくすべを学ぶのである。

我々も、日本と中国本土からは遠く離れた、尖閣を、互いのものであるとして争う前に、沖縄や台湾、周辺の島々の共同漁場の一つとして、またそれらをつなぐ群島の一つとして、とらえ直す必要がある。」



◎梶田孝道著

『統合と分裂のヨーロッパ——EC／国家・民族——』（1993年、岩波新書）

羽場氏の論考が**国家の概念が強固な世界**での対立の回避についての考察とすれば、梶田氏の著作は**統合によって国家の概念が相対化しつつある世界**での対立の変化と将来の可能性について考察したものと言えるでしょう。僕にとっては20代後半から30代の初め頃以来、この手の著作に触れるのは久しぶりのことで、内容を理解するのが困難でした。その中で僕がなるほどと思い、岡部さんが僕たちにこの本を通じて伝えたかったのはこのことではないかと思ったのは、ECの成立によって、今まで鮮明だった**国家権力（国民国家）と地域・民族の対立が相対化され、緩和されてきた**ということです。つまり、ある国家のある地域やその地域の主たる民族（国全体からすると少数民族）は、今まではその国家の国民で、その国家の一員であり続けるか、離脱するか、二者択一だったわけです。超国家（EC）の成立によって、その地域・民族はその国家の一部であると同時にECの一員であり、また、隣接する隣の国の同一民族の人々と、ECの中で一つの共同体を形成することができるわけです。梶田氏はそれを「**三空間並存モデル**」「**多元的アイデンティティ**」「**フレキシブル（可変的）アイデンティティ**」

と呼んでいます。

特に強調したいのは、それ（EC諸国内の人々の帰属意識やアイデンティティの在り方、三水準への権力の配分）が**超国家・国家・地域**という三者間の相互排他的な選択ではなくなっている点であり、裏返して言えば、**複数の水準を同時に肯定的に選択する人々が多くなっている点**である。

もう一つ興味深いのは、梶田氏はスコットランドの独立問題を挙げて、民族や人種や移民問題の背後に、現在の経済の問題があることを指摘していることです。イギリスが世界に冠たる大英帝国だった時代、スコットランドの独立運動は下火になります。大英帝国の一員であることによって、スコットランドも潤うことができたからです。

今またスコットランドの独立問題浮上してきたのは、イギリスの現在の経済の在り方が原因になっているのだと思います。また、上述のカナダの「**二言語・多文化主義**」政策の維持・発展のためには膨大な予算が必要で、経済問題が先行きに大きな不安材料を与えていることを梶田氏は指摘しています。

おわりに

僕の非力のために、先生の話をも忠実に再現することができませんでした。「話題提供者」という言葉に甘えさせていただき、先生が提供してくださった話題を紹介し、その話題に即して、僕が勉強したこと、考えたことを少し付け加えさせていただきました。ださい。（文責 佐野）



「辻よし子と歩む会」のHPリニューアル！「辻よし子と歩む会」で検索してみてください

「くさしぎ・草の根市議と市政を考える会」の紹介

「くさしぎ」は鳥の名前ですが、「草の根市議」という意味も込め、会の名前としました。2011年の福島原発事故以後、多くの気づきがありました。その中で「今まで私たち市民は、あまりにも政治家に政治をお任せにしてきたのではないか」という苦い反省もその一つです。「くさしぎ」はこの反省に立ち、もっとも身近な市政に、私たちの代表の「草の根市議」を誕生させ、その市議とともに市政に主体的に関わろうと呼びかける、あきる野市民の会です。

2011年11月からこうした趣旨に基づき、西多摩地区の草の根市議に話を聞いたり、どういう市議が望ましいか等話し合いを重ねてきました。その結果、市民代表としての「草の根市議」は次のような要件を持つのではないかとイメージがまとまりました。

- ①市民といっしょに市政を考える。
- ②市の現状と問題点を市民に情報発信する。
- ③開発優先ではなく、環境優先(放射能への危機感を持つ)。
- ④マイノリティの視点をすくいあげる。

以上のような要件を満たす市議を市議会に送り、ともに市の課題を考え、ともに解決していく良き伴走者になりたいと考えています。あきる野市を今以上に暮らしやすい「マイタウン」にできるよう、多くの市民が「くさしぎ」の活動に参加して下さる事を期待しています。

～つながりましょう～

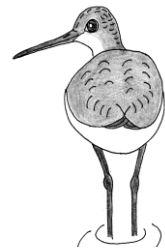
(^_^)/ 「くさしぎ」メンバー募集中 (*^_^*)

「あきる野のごみが気になる」「放射能は大丈夫?」「市の財政はどうなってるの」なんて市政に少しでも興味がわいた方、「くさしぎ便り」を今後も読みたい方、「くさしぎ」のメンバーになりませんか? ひとりの市民として楽しく市政に関わりましょう。

連絡先 ・ e-mail kusasigi@nifty.com

・ 〒190-0154 あきる野市高尾 182-1

Tel&Fax 042-596-4569(佐橋)



★くさしぎニュース★☆

- 10月17日(木) 横田基地にオスプレイが配備されないように!

「くさしぎ・草根の市議と市政を考える会」で「横田基地へのオスプレイ配備・飛来、並びに、米軍機騒音に関する要望」を市の企画政策部に提出しました。主な内容はここ最近、米軍機があきる野市上空を飛ぶことが多くなり、騒音もひどくなっていることに対し、あきる野市でも騒音測定して欲しい。*オスプレイの横田基地配備については、すでにあきる野市も政府へ撤回の要請をしています。今後も粘り強く要請を続けていくことをお願いしました。

- 9月19日に「GID 西多摩」と連名で、市の教育委員会に学校の先生たちが「性同一性障害」のことを正しく理解できるよう、当事者の話を聞く研修会を要請したところ、「研修の進め方について研究、検討していきたいと思います」という前向きな回答をいただきました。

New!